坪田譲治全集

3

新潮社

坪田譲治全集 第三巻

印刷 昭和五十二年九月十五日
発行 昭和五十二年九月二十日
著者 坪田譲治（つぼたじょうじ）
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京（〇三）二六六―五一一一 業務部
二六六―五四一一 編集部
振替番号 東京四―八〇八
印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社
定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© JÔJI TSUBOTA Printed in Japan 1977

坪田譲治全集 第3巻 目次

風の中の子供　七

短篇小説（昭和12年～昭和13年）

弱い心一景　六八
子供のともしび　七二
甚七南画風景　八二
賊の洞穴　九六
胡蝶と鯉　一〇四
柿の甚七　一二四
甚七乗馬日誌　一三七
老人浄土　一四四
野尻少女　一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

河中の岩　一五七
失われたる田園　一六〇
家　一七八
漁夫の辞　一九八
包頭の少女　二〇七
家に子供あり　二二三
*
あとがき　坪田譲治　二二九
編集後記　二三三

（箱カット・中尾彰）

坪田譲治全集 第3巻（小説三）

風の中の子供

テープや紐を織る工場が村の端れに立っていた。資本金八万円、職工四十人。それでも組織は株式会社で、明治の時代に建てられ、赤煉瓦の煙突を高く聳やかしていた。

夏のある日、その会社の近くの石橋の上で、三平と金太郎が出会った。三平は一年生、金太郎は二年生。ところで、其時金太郎がニヤニヤ笑ったのである。三平を馬鹿にした笑方である。

「なんだい。」

三平がとがめた。然し金太郎はニヤニヤをやめない。

「なんだい。」

三平は喧嘩腰になる。と、金太郎が顔を突き出して言う。

「お前んとこのお父さん、今度会社をやめさされるんだぞう。」

「ウソだあい。」

三平が言う。

「ウソなもんかい。見てて見ろ。やめさされて、警察につれて行かれるんだ。お巡りさんにくくられて、御免なさい御免なさい、言い言い引張って行かれるんだ。」

「バカッ。」

もう承知出来なかった。三平は棒を拾うと、金太郎の頭を叩いた。コツンと大きな音がした。そこで棒を投げつけて、家の方へ駆け出した。十間ばかりで振返ると、金太郎顔を真赤にして追い駆けて来る。とっさに、道の小石を拾いとり、金太郎に投げつけて、また家の方に駆け出した。家に五六間の処に来ると、門に兄の善太が立っていた。それを見ると金太郎は追うのをやめた。何しろ、善太は五年生である。

「どうしたんだい。」

善太が声をかけた。

「だってさ——。」

金太郎が大声で語り始めた。

「ボク、何もしないのに、三平チャンが棒で頭を打つんだもん。大きなコブが出来ちゃった。」

金太郎は頭に手をやり、さも痛そうな表情をして見せる。

「ウソだあい。」

三平は左足を前へ出して構えている。然し善太としては、一応三平を叱って置かねばならぬこの場の有様だ。

「三平チャン、イタズラしちゃ駄目だよ。」

「ウソだあい。」

三平は繰返す。

「だって、今、棒で打ったじゃないか。」

金太郎が一歩踏み出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ウン、打った。」
三平は応じる。
「どうして打ったんだい。」
これには三平困るのである。目をパチクリやるより仕方がない。でも、三平も一歩踏み出して言ったのである。
「打った。ああ、打った。」
この言葉と調子の中に、理由の存することをいい含めた。それは善太に解って貰えない。
「駄目だよ、三平チャン。」
善太はこんな叱り方をする。
「だってさ、金チャン、悪いんだもの。」
三平が言うと、直ぐ金太郎がアゴを突き出して言って来る。
「悪いかあ、悪けりゃ言って見ろ。」
これは困った。返答は口一杯に充ち満ちて、頬さえ熱くなってくる。それでも口の外へは出て来ない。素早く石を拾い上げ、右手を高く振り上げた。石に返答させるのである。と、善太が前に立ちはだかり、その右の手を抱きかかえる。
「駄目だよ。乱暴すんなよ。」
「ウウン、金チャン、悪いんだもん。」
善太の手の中で、三平は身体をゆすって暴れた。

石を投げようとする三平を、善太が抱きとめているその隙に、金太郎は一歩一歩後向きに引き上げた。やっと男子の体面を保つことが出来た。十間ばかりも行った時、そこで彼は大声を上げた。
「やあい、三平の馬鹿野郎ッ、お巡りさんにくくられて、御免、御免、御免なさアい。」
節をつけて、腰を屈め、一踊りして逃げて行った。善太と三平は列んで之を見送った。三平はまだ口惜しくて、右手の石をその時一層堅く握りしめる。橋の上で金太郎がもう一踊りして見せると、三平はその方に五六歩勢いつけて駆け出し、届きもしない彼に向って、力一杯石を投げた。金太郎がいよいよ見えなくなった時、初めて善太に言って聞かせた。
「金太郎馬鹿なんだよ。」
「どうして馬鹿なんだい。」
「ウン、あいつね——。」
勢いこんだが、この話はどうも少し行きつまる。
「内のお父さんが会社をやめさされるって、それから、お巡りさんに引張って行かれるって、そんなことないやねえ。」
「そうさあ。」

そう言ったが、善太にはこれは少し心配である。お母さんに直ぐ言わないでは居れない気がする。二三度首を傾けて見て、それから家へ駈け入ろうとする。と、三平が聞くのである。
「兄チャン、どこ行くんだい。」
「ウン?」
お母さんに言いつけると言っては、おとなげなくはないだろうか。弱虫ということにならないだろうか。善太は言い直したのである。
「お茶飲みに行くんじゃないか。」
「ボクも行こうっと。」
二人は茶の間へ駆け込んだ。お母さんは縫物をしていらっしゃる。善太はやはりいわないで居れない。
「お母さん、佐山の金太郎ね、悪いんだよう。僕んとこのお父さん、会社をやめさされて警察へ引張って行かれるって——。」
お母さんは顔を上げたが、これを聞くと、返事の言葉が出なくなった。お父さんに不正があるとは考えないが、会社には永い間紛擾ばかり続いている。株主という株主は腹黒いものばかりである。その一人の子供がこんなことを言うようでは、何が起るか解らない。悪いたくらみが計画されているに違いない。今迄の暗い事件が次々と思い出された。ついボンヤリと考え込んだのである。これを見ると、三平が快活に言い始めた。
「ウン、お母さん、大丈夫だよ。ボク、金太郎の頭を棒で叩いてやったんだ。コツンって、おおきな音がしたんだ。コブだって出来たらしいや。あいつ、ウンウン言って、泣くの堪えていたんだよ。此度言ったら、それこそ、もっとヒドク叩いてやるよ。もっと大きなコブ出してやるよ。ね、お母さん、そうしたら、あいつ、泣き泣き御免、御免って言うでしょう。だから、大丈夫なんだよ。」
「そうかねえ。」
お母さんは子供達に心配させまいと、少し微笑して見せたのである。然し気懸りで、聞いて見たのである。
「金太郎さん、他のことは言わなかった。」
「そうさあ。言ったらボクもっとやってやったんだ。」
三平は大威張りだ。少しすると、彼はこの喧嘩がお父さんに知れるのが心配になって来た。
「お母さん、さっきの喧嘩お父さんに言わないでね。金太郎のコブのことも言わないでね。」
「ハイ、ハイ、だけど、喧嘩しちゃいけませんよ。」
「ウウン、喧嘩したって、ボク負けないよ。」
安心した三平はやはり大威張りである。

暑中休暇がやって来た。村には一時に子供の数が増したように思われた。どこにいても、子供の声が聞えて来る。三平はその日、いつものように会社の方へやって来た。三時の休みが近かった。お父さんが会社の販売部からお八つを買って帰って来る時間である。

ところが、どうしたことか、会社の門に子供が沢山集まっている。今日は会社の株主総会の日であった。三平のお父さんを重役から落す陰謀のたくらまれている日であった。金太郎のお父さんが代って専務になるという日であった。然し三平はそんなことは何も知らない。

「おおい。」

と、みんなの方へ駆け寄った。金太郎も居れば、銀二郎も居り、鶴吉も居れば、亀一も居る。だが、今日それらの仲間が一人も彼の呼びかけに応じようとしない。聞えぬふりをしている。

「おい、何やってんだい。」

近よって笑いかけて見る。みんなは黙っている。ウン——三平は考える。——これは此間金太郎と喧嘩したせいなんだな。で、まず金太郎に声をかける。

「金チャン、怒っているの？」

「ウウン。」

金太郎はカブリを振る。

「フーン、じゃ遊ぼうよ。」

「ウン。」

安心して三平はみんなの間へ割り込んだ。そこへ羽織を着た村の成人がやって来た。会社の中へ入って行く。これを見ると、金太郎が大声で呼んだ。

「五ばんッ。」

「六ばんだい。」

銀二郎がいう。

「五ばんですよッ。」

金太郎が主張する。

「五ばんッ。金チャンの言う通りだ。」

亀一が金太郎の御機嫌をとる。

みんなは、今株主総会にやって来る成人の数を数えている。それらが皆三平のお父さんを重役から落して、金太郎のお父さんを専務に推薦する筈である。三平にはそんなことは分らないので聞いて見る。

「何やってんだい。」

返事するものが一人もない。とまた成人がやって来た。

「六ばん、七ばん、八ばん。」

金太郎の大声だ。三人は金太郎の方に笑顔を向けて言うのである。

「ホホウ、門番君、景気よくやってるな。」

何だ、門番遊びか。三平は分ったような気がして来た。今日、会社にはお祝でもあるのかも知れない。自分も景気よくやって見よう。向うから四人の成人が来るのを見ると、三平はいち早く呼んだのである。

「九ばん、十ばん、十一ばん、十二ばん。」

ところが、笑い笑いやって来た四人のものが、その声で三平の方を振向くと、むずかしい顔をしたのである。三平は少し不安になって考える。イタズラが過ぎたかしらん。ここにいては叱られはしないか。然し勇ましい子供三平、次に来る人を見ると声を上げた。

「十三、十四、十五ばん。」

此度の一人は会社の支配人格、赤沢銑三である。此度こそはと、三平は彼の笑顔を待ち受けた。然し彼は金太郎の前に小腰を屈めた。

「大勢来ましたか。」

「十五人だけど、三平君邪魔ばかりするの。」

「ほっときなさい。何も知らないんですもの。」

これでは三平黙って居れない。

「知ってらあい。」

「ホウ、そりゃエライ。」

「エライさあ。」

赤沢は苦笑しながら入って行った。これで三平は俄に元気が出て来た。

会社の門で大分時間がたった時、金太郎が中からフッフと駆け出して来た。

「オイ、行って見ないか。事務所で喧嘩やってんだぞう。三平君のお父さんがみんなと顔を真赤にして議論してらあ。」

それッと言うので、子供達は駆け出した。事務所の窓には男女の職工が頭を集めて覗いていた。異常な総会を一心に耳を列べて聞いていた。子供等はそこへ頭を突き込んで、猿のように格子に手をかけて登りついた。三平もそれをやって中を覗いた。その時、事務室の奥の応接間からドヤドヤと人が溢れ出て来た。総会は終ったのである。口々にガヤガヤ言いながら、みんな門の方へ出て行った。工場の中へ入って行くものもある。職工達も赤沢銑三が出て来ると、俄に工場へ引き上げた。

「お父さん、キャラメル買って。」

金太郎がお父さんを見つけて甘えている。

「何言ってんだい。」

「買ってよう。」

然し、三平が気がついた時には、その辺に一人も人がいなかった。唯一人、三平のお父さんばかりが事務室の上席

の机に向って、煙突のように煙草の煙を吐いていた。これを見て、三平はお父さんの側に駆け寄った。
「お父さん。」
お父さんは返事もせず、眼の前ばかり見つめている。
「お父さん、帰ろうよ。」
椅子の背に手をかけ、お父さんの顔を覗く。お父さんは大きな眼をしている。然し三平の顔は映らないらしい。三平はお父さんの顔近く大きな声をして呼んだ。
「お父さん、ボクさっきから待ってたんだよ。今日は三時に帰らなかったね。もう五時なんだよ。」
返事がないので、三平はお父さんの硯箱を開け、ペンや印形をいじって見る。それからまた聞いて見る。
「お父さん、みんなと喧嘩した？　え、勝った？」
その時、女事務員がやって来た。初めてお父さんが声をかけた。
「みんな、どうしたんですか。」
「事務と男工の方達は食堂で佐山さんのお話を聞いて居ります。」
「そうですか。私も挨拶したいが、いずれ明日参りましょう。事務の引継ぎもその時やりましょう。佐山君に言っといて下さい。」
お父さんが立上った。三平はそれだけで嬉しい。早くこを出たいのである。お父さんの手に机の側からぶら下る。入口の土間に下り立つと三平は気がついた。お父さんがまだスリッパをはいている。
「お父さん、靴は？」
いつもお父さんを迎えに来て、様子を知っている三平だ。直ぐ下駄箱からお父さんの靴を取出す。と、次に三平はお父さんの帽子に気がつく。また傍の帽子掛にピョンと飛び上る。
「お父さん、もう忘れものなかった？」
こんなませたことも言うのである。
お父さんの手を引いて、二人は門の方へ出て行った。いつものことでお父さんと歩くと、三平は晴れがましい気持がする。犬だって恐くないし、他村の子供なんか、何人だって来い！　である。会社の門を出て、会社の角を曲った時、三平は初めて言った。
「お父さん、会社やめたの？　こんな会社なんか、いらないや、ねえ、新しいのつくればいいや。」
家が近くなった時、三平は駆けて玄関に飛びこんだ。そして大声に呼び上げた。
「お母さん、お父さんが帰って来たよ、会社やめたんだってさ。新しいのつくるんだってさ。」

茂った柿の青葉の上で、小さな日の丸の旗が風にヒラヒラなびいていた。善太が今それを木のてっぺんに結びつけたところである。下には三平が上を見上げて立っている。
「兄チャン、そこから遠くが見える？」
「ウン。」
「満洲なんかも見える？」
「ウン。」
「戦争なんかしてるかい。」
「ウン。」
「鉄砲どんどん打ってるかい。」
「ウン。」
「いいなあ、やっぱり日本勝ってる？」
「ウン。」
兄チャンの返事はどうもアイマイで、三平には少しもの足りない。然し三平は嬉しいのである。木に登りたくてたまらない。両手両足で太い幹に抱きついて見る。一尺も登らないうち、もうズルズルとすべり落ちる。此度は両手にツバキをつけ、勢いこんで飛びついて見る。やはりズルズル落ちて来る。仕方がない。また善太に声をかける。
「兄チャン、海なんか見えるかい。」
「ウン。」
「軍艦なんか走ってるかい。」
「ウン。」
「鯨なんかも泳いでいるかい。」
「ウン。」
「いいなあ。飛行機は？」
「見えるさ。」
「フーム、戦争してる？」
「戦争している。」
が、その時何を考えたか、スルスルと善太は上から降りて来た。彼方に金太郎や鶴吉のいるのを見たのである。けれども、善太はいうのである。
「ね、三平チャン、魚や虫をとりに行こう。蟹なんかもとって来よう。」
「どうして？」
三平は不服だった。だって、今旗を立てたばかりである。軍歌も唄わず、ラッパも吹かず、虫とりに行こうなんて、そんな法があるものか。然し善太は言うのである。
「セミや、カブト虫や、それから蛙や鮒をとって来てさ、ここへ大猛獣国をつくるんだ。そして兄チャンと三平チャンとで、そこの大将になるんだ。『類人猿ターザン』って活動見たことあるだろう。象や河馬を手下にしてさ、大戦争したじゃあないか。あれをやろうよ。」
なる程、それはいい。三平はピョンと跳ね上って見せた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com